

ねん がつ ついたち
2022年5月1日

ふっかつせつだいさんしゅじつ
復活節第三主日

きくち いさおだい しきょう
菊地 功大司教 メッセージ

復活された主イエスをあかしする弟子たちの言葉と行いは、どれほど力強いものだったのでしょうか。その影響力に恐れをなした大祭司たちは、ペトロをはじめ弟子たちを最高法院に引いていき尋問し、黙らせようと試みます。最後の晩餐の頃の弟子たちであれば、あっという間にその脅しに負けて、口を閉じたのかも知れません。しかし使徒言行録が記している弟子たちは、大きく変わっていました。激しくののしられ脅されても、「イエスの名のために 辱めを受けるほどの者にされたことを喜び」最高法院を出て行ったと記されています。この大きな生き方の転換には、復活の主との出会いがありました。

イエスが捕らえられたあと、三度にわたってイエスを知らないと言ったペトロに対して、復活されたイエスは、同じく三度にわたって、「私を愛しているか」と尋ねたことを、ヨハネ福音は記しています。あの晩の苦い思い出を心に抱くペトロは、しかし三度「わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と応えます。

よく知られていることですが、愛するという行為にイエスはアガペーを使います。それに対してペトロはフィリアを使って応えます。アガペーは命をかけて相手のために身をささげる愛であり、フィリアは友愛です。命をかけてわたしの愛に生きるのかというイエスの重ねての問いかけに、ペトロは友愛的な感情、すなわち自分を中心に据えた心持ちを持って応えます。しかしそれではイエスが弟子として従うものに求める生き方、つまり無私の愛には結びつきません。イエスは、自分を捨てて、自分の十字架を背負って従うことを求めていました。それを具体的に意味するアガペーの愛をペトロは理解できていません。そこでイエスは三度目に、ペトロが理解するフィリアの愛を使って、重ねて尋ねます。

ここでペトロは始めてイエスの願いを心に感じ、「主よあなたは何かもかご存じです」と応えています。やっと、愛する行動の中心はペトロ自身からイエスに移ります。ペトロはイエスに身を委ねることで、始めてイエスのように生きることが可能となりました。

イエスにしたが従うものの人生の中心にあるのは、自分じぶんではなくてイエスご自身じしんです。イエスご自身じしんに完全かんぜんに身を委みねることができたとき、つまりわたしたちが自分の弱よわさを認めみとめたときに、初めて私わたしを通つうじて福音ふくいんがあかしされるのです。福音ふくいんのあかしは、私わたしが中心ちゅうしんになっているときには実現じつげんしません。伝えるのは私わたしの思おもいではなくて、私わたしを生いかしてくださる主しゅご自身じしんです。

今年ことしわたしたちはウクライナへのロシアの武力攻撃ぶりよくこうげきという事態じたいに直面ちよくめんし、戦争せんそうの危機ききを肌はだで感かんじる中で、教皇様なかにきょうこうさまと一致いつちして、全人類ぜんじんるいを、そして特とくにロシアとウクライナを聖母せいぼの汚よごれなきみこころに奉獻ほうけんしました。

聖母せいぼへの奉獻ほうけんという行こうい為はは、本質ほんしつてき的に聖母せいぼを通つうじてイエスに奉獻ほうけんするという行こうい為はです。わたしたちは完全かんぜんに聖せいなる方ほうにわたしたちを「委ゆだね」て、それでよしとするのではなく、委ゆだねることかんぜんで完全せいに聖ほうなる方ほうがわたしたちを聖せいなるものとしてくださるように決意けついをするのです。つまり、ただ恵めぐみを受うけるだけの受動態じゅうどうたいではなくて、わたしたちが能動のうどうてき的に聖せいなるものとなるために行動こうどうすることが不可欠ふかけつです。ですから、奉獻ほうけんの祈いのりをしたから、あとは自動じどうてき的に聖母せいぼが平和へいわを与あたえてくださるのを待つまつと言うことではなくて、奉獻ほうけんの祈いのりをしたからこそ、完全かんぜんに聖せいなる方ほうに一致いつちするための行動こうどうを起おこすことが必要ひつようです。復活ふっかつの主しゅとの出で会あいは、主しゅとの一致いつちのうちに福音ふくいんをあかしする行動こうどうへと、わたしたちを招まねいています。イエスを心こころに抱だいて、一歩いちぼ前進ぜんしんする信仰しんこうに生きましょう。